

Harem Sister
ハーレムシスター
2

小説 竹内けん 挿絵 神保玉蘭

立ち読み版





登場人物紹介

Characters

ジェシカ

朱雀神殿でシスター見習いをしている少女。清楚でおとなしい性格。



ユーフォリア

ミルクア大聖堂の頂点に立つ聖女。一年前ヒルクルスにすっかり開発された。



ヴィクトリア

ドモス王国の都市レヴィの領主を務める女将軍。姪のジェシカを溺愛している。



グレイセン

元女僧兵で、現在はヒルクルの従者として旅に付き添う女戦士。



ベルベット

女性ばかりのミルクア大聖堂を束ねるシスターたちの教師役。



シギン

ミルクア大聖堂の見習いシスター。いつも明るい元気娘。

ヒルクルス

乱世の梟雄になることを夢見て旅する青年剣士。

第一章 仕組まれた邂逅

第二章 胡散臭い客人

第三章 女將軍の弱点

第四章 叔母と姪

第五章 秘策

第六章 夢への階

ヒルクルスは逸物の先端を、ジェシカの陰唇へ添えた。

「む、無理、わたくしの鶏がらみたいな身体に、そんな大きいもの入らない」
顔を盛大に左右に振るったジェシカは涙ながらに訴えた。

「そうですか？　ならやめましょう」

「えっ!？」

ヒルクルスがあっさり引いたので、逆にジェシカは驚く。

少女が戸惑っているうちに、ヒルクルスは身支度を整えながら優しく語る。

「無理強いはしませんよ。ぼくはジェシカ様を悲しませることはしたくありません。ただ、このようなことをしてしまった以上、もはやレヴィには留まれないでしょう。さようならです」

「そ、そんな……」

「では。このような無礼をしてしまったこと、謝っても許されることはありませんが、申し訳ありませんでした」

馬鹿丁寧にお辞儀をしたヒルクルスがあずまやから出ていこうとするのを、ジェシカは必死の声で呼びとめた。

「ヒルクルス様っ」

「何か？」

何気なく応じながらヒルクルスは駆け引きに勝ったことを悟った。

濡れた股を開いた巫女は、涙ながらに訴える。

「お情けを賜りとうございます。わたくしを墮落させてくださいませ」

「そんなご無理をなさらなくとも……」

男の表面的な演技に騙されたジェシカは、イヤイヤと首を横に振るった。そして、涙ながらに訴える。

「無理なんてしていません。わたくし、ヒルクルス様にやられたいのです。ヒルクルス様のおちんちんを入れて欲しいのです。セ、セックスしてください！」

「……」

ヒルクルスが向き直りじつと見下ろす先で、青い巫女服に身を包んだ少女は、乳房と陰唇を晒したまま、身を硬くしている。

その必死さに嘔きそうになりながらも、ヒルクルスは頷いた。

「そこまで言われると男冥利に尽きますね。ぼくもジェシカ様のオマ○コにおちんちんを入れたくて仕方ありません」

「あ、ありがとうございます」

ジェシカの顔がぱつと明るくなる。

（こういう表情をされると、少し罪悪感を覚えるなあ。しかしまあ、ことがうまく転がるのは気持ちいいものだ）

露悪的な気分になりながらヒルクルスは改めていきり立つ逸物を取り出し、心優しき巫

女の陰唇に添える。

「あ、あの……わたくし、こういうこと初めてで……その……え……と、優しくしてください……」

「わかっていきますよ。この一面の花々のいずれよりも貴重な花を頂くのです。細心の注意を払いますよ」

「あ、ありがとうございます……」

ヒルクルスのおためごかしに、ジェシカは納得してくれたようだ。

「それじゃ、入れますよ」

宣言と同時にヒルクルスは、逸物を押し込んだ。

ザクリ。

小さくも美しい膣穴は大きく広がり、このレヴィ領でもっとも高貴なる女性の処女膜は呆気なく破れた。

「ああ……！」

ズブズブズブズブ……。

ヒルクルスは一気に押し込めるだけ押し込んでやった。

「入りましたよ」

「ああ、温かい、ヒルクルス様の温かさが伝わってきます」

痛いだろうに、ジェシカはそれを我慢してヒルクルスとの結合を喜んだ。

小柄な少女である。膣洞も狭かった。それでいて処女だけあってギチギチに締めてくる。(巫女だ、聖女だ、令嬢だ、とお高く止まっただけでもちんぽを入れられたらキュッキュッと締まる。こんなもんだよね)

極上の美少女の膣穴に逸物を入れたヒルクルスは、相手を絶頂させることは無理と諦めて腰をゆつくりと振るった。

ザラザラの褌が肉棒に絡みついてくる。

(くぅ〜可愛い顔して、なかなか侮れないオマ○コだ)

すぐ出すのは男が廃^{すた}れると思うが、長く持たせるのは処女に対して苦痛を与えるだけだ。ヒルクルスは我慢せずに放つことにした。

「出しますよ」

「は、はい……」

清純無垢な巫女様も、男女の営みの基礎ぐらいは承知していたようだ。

「くっ」

うめき声とともにヒルクルスは射精した。

ドビュ、ドビュ、ドビュユユ!

小柄な少女の胎内に、薄汚い男の欲望が注ぎ込まれる。

「はぁぁぁぁぁ……」

絶頂ではないだろうが、膣内射精される気持ちよさにジェシカは可愛らしくのたうった。

ヒルクルスが思う存分に欲望を放ち、小さくなった逸物を引き抜くと、膣穴は小さく締まった。

「ふあ」

気の抜けた悲鳴とともに、膣穴は再び開き、赤い血の混じった白濁液が噴き出した。
(まったく、男に免疫のない清純な巫女ってやつは、ちよいと言いか、呆気なさすぎだな)

あまりにも思惑通りにいきすぎて拍子抜けしながらも、ヒルクルスはハンカチで、少女の股間を綺麗に拭いてやった。

するとジェシカが恐る恐る質問してきた。

「あ、あの……わたくしの身体で楽しめたでしょうか？」

「それはもちろん、最高の体験でしたよ」

ヒルクルスが如才なく答えると、ジェシカは本当に嬉しそうに笑顔を浮かべる。

「それじゃ、また会ってくださいますか。その、この鶏がらみたいな身体でよろしかったら、その、好きなだけ楽しんでください」

「鶏がらではありませんよ。妖精のような身体です。ぼくはジェシカ様のオマ○コを楽しむためにこの地に留まってもいい」

「ああ、そのように言っていただけなんて……幸せです」

ヒルクルスはジェシカを騙そうとしているのである。それなのにこんなにも信頼されて



しまって、
胸の奥がチクチクと痛んだ。

「おまえには男としてのプライドはないのか？ 仮にも王族であった男であろう？」

「美しい女性の足を舐めるのは男の誉れですよ。男はみな美女の奴隷ですから。もう一方の足も舐めさせてください」

右足の指を隅々まで舐め終わったヒルクルスは、次いで左足を押し戴き、同じように紫色のロングブーツを脱がせてから、白いズボンの裾をめくり、薄紫色の靴下を脱がした。

そして、またも足を舐め始める。

その光景を呆れた表情で見下ろしていたヴィクトリアが、やがて我に返り口元に冷笑を浮かべた。

「野心家とは愚かだな。そして、哀れだ。自らの野望のためには女の足まで喜んで舐めてみせなくてはならないのだからな」

ピチャリピチャリピチャリ……。

足を舐められたからといって、肉体的にはそれほど気持ちいいものではないだろう。

しかし、女の精神を高揚させる効果があるようだ。ヴィクトリアの頬が上気し、目元が潤み始める。

そして、五指を舐め終わったところで、ヒルクルスは答えた。

「悲しいことばかりおとしやる。どうすればぼくの愛を信じてくれるんですか？ 愛する女性の足を舐めるなんて屈辱でもなんでもありません。ぼくはヴィクトリア様のおしっこだって喜んで飲みます」

ヒルクルスの戯言に、ヴィクトリアはカチンときたようだ。

「どこまでも愚弄するのだな。よからう。わたしができないと思っているのだろう。あまり、侮るなよ」

ヒルクルスを蹴倒したヴィクトリアは立ち上がった。

そして、素足のまま床に仁王立ちすると、白いズボンを脱いだ。

筋肉と脂肪の調和の取れたむっちりとした脚線美は、これぞ女の足といった凹凸に富んでいた。

上半身のブラウスの裾から、薄紫色のショーツが覗く。さすがは貴族だけあって、透かしの入った高級感のあるショーツだ。

そこに両手を添えて、すつと脱ぎ捨てる。

頭髮が豊かなだけあって陰毛も豊かだった。まるで炎のように猛っている。

(すげえ、剛毛。こりや性欲も強そうだな)

思わず生唾を飲むヒルクルスに向かって、ヴィクトリアは陰毛をかきわけて、陰唇を開いてみせた。

「そこで口を開いて待っている。望み通り、小便を飲ませてやる」

ヒルクルスは素直に口を開いた。

「ふっ、殊勝だな」

冷笑を浮かべたヴィクトリアは、多少の酔いもあったのだろう。勢いに任せて、放尿を

開始した。

ブシュ……。

噴き出した液体が、ヒルクルの顔にかかった。

「あっ」

放尿を開始した直後、我に返ったのかヴィクトリアは尿道を締めようとした。しかし、一度始まった放尿、それも立ちションを止めるのは容易なことではないようだ。

なんとか止まったが、下腹部や両太腿がプルプルと震える。ただし、一度尿道口に入ってしまった液体を再び膀胱に戻すことはできない。

それに女は、男と違って尿道が短い分、我慢が利かないのだ。

後悔の表情を浮かべて必死に耐えるヴィクトリアの顔は艶めかしく美しかった。

「はぁ……」

気の抜けた吐息を漏らして、女の理性は肉体の欲求に負けた。

ブシヤアアアアア!!!

まるで水風船が爆発したかのように、勢いよく熱い液体が撒き散らされる。

その下では、ヒルクルスが大口を開けて待っているのだ。

顔にかかったのはもちろん、目や口に入り、全身がびしょびしょだ。

それでもヒルクルスは躊躇わず、ゴクゴクと喉を鳴らして飲んだ。

その光景にヴィクトリアは驚く。

「ば、馬鹿な……。女の小便を飲むなど、貴様正気か？」

やがては放尿が終わった。するとヴィクトリアはヘナヘナと腰を抜かし、その場に膝をついた。

そこに歩み寄ったヒルクルスは、その肉感的な唇を奪った。

「うん、うむむ……」

自分の尿を飲んだ男の口である。接吻などしたくないだろうが、飲ませてしまった以上は受け入れねばならないと思っているようだ。

眉間に皺を寄せながら舌を絡めてくる。

所詮は貴族のお姫様だ。育ちがいいだけあって、人前で放尿するなど考えたことがなかったろうし、まして男の顔にかけて、無理矢理飲ませるなどと想像したこともなかったに違いない。

申し訳ないという気分になってしまったようだ。

男に小水を浴びせたことで、かえってヴィクトリアのほうが精神的に追い詰められてしまったようである。

接吻を終えたところでヒルクルスは、茫然としているヴィクトリアに質問した。

「どうです。少しはぼくの愛を信じてくれましたか？」

「貴様の愛など信じはせぬが、貴様が本気だということは信じてもいい……」

自らの恥知らずな行為に恥じたヴィクトリアははにかみながら頷いた。そこでヒルクル

スは、ヴィクトリアを抱え上げる。

結構重いが、ここは格好のつけどころだ。

「それで結構ですよ。寝室は隣ですか？」

「ああ」

ヒルクルスはヴィクトリアを俗に言うお姫様だっこしたまま、隣室に入った。

そこは確かにヴィクトリアの寝室なのだろう。中央にある寝台も、いかにもヴィクトリアの好みそうな重厚な造りだ。

そこに手中の女を仰向けに寝かせると、その上に覆いかぶさりながら、ブラウスの前を開く。

気位の高い女領主様はすべてを諦めたように、胡散臭い男の好きなようにさせた。

薄紫色の豪華なブラジャーに包まれた乳房があらわとなる。

両手を背中に回してブラジャーのフックを外す。軍服の上着を脱がしていなかったものの、肩紐のないタイプだったおかげでなんとかブラジャーを奪い取った。

ブルンと巨大な肉の塊が飛び出す。

乳房は大きく、腹部は括れ、臀部は大きい。凹凸に富んだ足も長い。

（こういうのをゴージャス美人って言うんだろうな）

感動したヒルクルスは、ヴィクトリアに訴えた。

「服の上から、凄いおっぱいだということは十分に予想していましたが、生で見ると予想

を超えますね。まさに女体の芸術だ」

「口が上手いな」

そんな見え透いた世辞に乗るものかと言いたげにヴィクトリアは眉をひそめる。

「ぼくは女性に対しては真実しか言いませんよ。触っていいですか？」

「ああ、好きにしろ」

許可をもらったヒルクルスは両手を伸ばして、双乳を手を包んだ。

脂肪と筋肉の絶妙な融合。柔らかくそれでいて張力がある。

(すげえ、弾力)

その揉みごたえたつぶりの乳房を、根元から頂にかけてギユウと絞り上げる。そして、舌先を伸ばすと、大振りの乳輪を舐め回すように舌を回転させた。

「ああ、くっ、うん……」

好きでもない男にでも乳首を執拗に舐められれば感じてしまうのだろう。恥辱の喘ぎ声とともに、ニョキリと乳頭が飛び出した。

それを見て取ったところで、ヒルクルスはサクランボを思わせる乳首を口に含むとチュウチュウと吸い上げる。

「くっ、油断ならぬ顔をしている癖に、乳房を前にしたら、急に無邪気な顔になったな」

「そうですか？ しかし、おっぱいしゃぶりながら真面目な顔をしていても変でしょ」

両手に巨大な果実を持ったヒルクルスは、その先端を交互に、夢中になって舐めしゃぶ

った。

その光景に、ヴィクトリアは苦笑する。

「なるほど、母性を刺激されるというのはこういうことを言うのか……。油断ならぬ男でも、おっぱいにしゃぶりついているときは可愛いものだ……」

「へ？」

「いやいい、続ける」

妙に達観しているヴィクトリアを他所に、ヒルクルスは心ゆくまで爆乳を堪能した。

「あ、ああ……ん、くつ、貴様、赤ん坊じやあるまいし、いつまでしゃぶりついているつもりだ、あっ、く、貴様しつこすぎるぞ。ああ、もう、やめろ、そんな左右同時なんて、ああ、そんなに強く吸つても、母乳など出ないんだぞ、ああ、それ、以上は、あ、ダメええええ!!!」

ビクビクビク……!!!

勃起した乳首を執拗に舐めしゃぶられたヴィクトリアは上体を激しく痙攣させた。

乳房だけでイったことを見て取ったヒルクルスは顔を上げる。

マジマジと顔を見られたヴィクトリアは、頬を染めて文句を言う。

「ど、どうかしたのか？」

「いえ、気のせいかもしれませんが、ヴィクトリア様はあんまりこういうことに慣れていない気がしたもので」

その感想に、ヴィクトリアは頬を染め、視線を逸らしながら答えた。

「当たり前だ。おまえも知っているだろう。わたしは十年前の十八のときにドモス国王ロレントにやられた女だ」

「そりゃ、ヴィクトリア様が十年前、領国を守るために気高く貞操を捧げたことは聞いていますが……まさかそれ以来、一度も？」

ヒルクルスの本気で驚いている様子に、顔を真っ赤にしたヴィクトリアは目を泳がす。

「別に寵妃になったわけではないからな。気高くもなんともない。惨めな降伏の証として貞操……処女を捧げただけだ」

「本当にそれ以来、一度の経験もないんですか？ こんな凄惨な身体をしています」
「ああ」

大真面目に頷くヴィクトリアを前に、ヒルクルスは盛大に嘆いた。

「この城の男どもは何をしていたんでしょう。こんな熟れ熟れの美女を、放置するなんて、もはや犯罪です。宝の持ち腐れ、神への冒瀆と言っている」

「まったく、大仰なやつだ。おまえはそうやって女を口説くわけか」

見え透いたお世辞とわかっていても、称賛されるのは悪い気分ではないだろう。ヴィクトリアの顔が綻ぶ。

実際、ヒルクルスは嘘をついているつもりはない。誠心誠意、本気でそう思っていた。「おまえほど厚かましく言い寄ってきた男がいなかったただけ。実際問題として、わたし

は男など欲しいなどと思ったことはないからな」

その言葉でヒルクルスは悟った。

「もしかして、ヴィクトリア様は、セックスに対してトラウマを持っていたりしますか？」
十年前、領国を守るために身を差し出し、一方的に陵辱されたという負の記憶しかない女である。

「さあな、わからん。わたしには生まれつき性欲がないと思うのだが……」

「そんなことあるはずありません。現にいまおっぱいでイったじゃないですか。ぼくが女としての遊びを教えて差し上げますよ」

ヴィクトリアが見抜いて散々に指摘しているように、口とは裏腹にヒルクルスは、ヴィクトリアを徹底的に利用するつもりである。とはいえ、別に破滅させてやりたいといった負の感情があるわけではない。

ここで知り合ったのも何かの縁。女としての遊びぐらいいは開花させてやりたいと思ったヒルクルスは、ヴィクトリアの腹部を跨いだまま立ち上がると、彼女のお小水に濡れた服をすべて脱ぎ捨てた。

ブルンと臍近くまで反り返った逸物があらわとなる。

それを見上げてヴィクトリアは目を見張る。

「これがおまえのちんぽか……？」

「まあ、噂のドモス国王ロレントの豪チンと比べれば貧相なものかもしれませんが、そう

見劣りもしないでしょう」

ヒルクルスが誇示するように振るうと、ヴィクトリアは赤面して目を逸らす。

「もう十年も昔だ。覚えていない。それにわたしはただ慰み者にされただけだから、じっくりと観察する余裕もなかった」

「そうですか？　ならじっくり見てください」

ヴィクトリアの胸に跨がったヒルクルスは、逸物の切っ先を鼻先に突き出してやった。

「……」

思わずヴィクトリアは寄り目になって、マジマジと逸物に魅入ってしまった。

「触っていいですよ」

「ああ……」

ヴィクトリアは恐る恐る、右手を伸ばし、逸物の幹を手にとると、スリスリと扱いた。

「硬いのだな。これをオマ○コに入れられるのがセックスなのだな」

「はい。でも、その前に、ヴィクトリア様の極上のおっぱいに挟みたいんですが、いいですか？」

「き、貴様。どんどん厚かましくなるな。そんなことわたしは、ロレント陛下にすらやったことはないぞ」

ヴィクトリアの応えに、ヒルクルスは笑った。

「それは嬉しいですね。その極上おっぱいの処女を犯す栄誉をぜひ賜りたいものです」

「おっぱいに処女も何もないだろ。挟みたいのなら勝手にしろ」

ヴィクトリアの許可をもらったヒルクルスは、そのままヴィクトリアの胸に座り込み、乳房の谷間に逸物を下ろす。

「左右からおっぱいで挟んでください」

「なんでわたしがそんなことをしなくてはならないのだ。まったく、わたしもつくづく人がいい。こ、こうすればいいのか？」

口では文句を言いながらもヴィクトリアは素直に両手で自らの乳房を左右から押さえた。「ええ、ありがとうございます。これでヴィクトリア様のおっぱいの処女はぼくのもです」極上の乳肉に包まれたヒルクルスはズッコズッコと腰を前後に動かし、プルンプルンの感触を逸物で堪能した。

「やっぱ、ヴィクトリア様のおっぱいは凄いですね」

「ああ、おまえのおちんちんも凄い。……熱い。おちんちんとはこんなに熱いものだっただな」

逸物の熱で、ヴィクトリアの中の女も、蕩うごけていつているのが表情を見ているだけでもわかる。

「ええ、ヴィクトリア様のおっぱいも温かくてプルプルでいい感じですよ」

「わたしはもはや二度と味わうまいと思っていたのだが……これが……おちんちん……か」充実した肉マンの狭間で赤黒い逸物が出たり入ったりする。その切っ先をヴィクトリア

は寄り目になりながら見つめていた。

自然と首が持ち上がり、口唇が開き、舌が伸びる。必死に伸ばされた濡れた舌尖が、亀頭の頂から滴る液を舐め取った。

「ああ、これがちんちんの味……？」

「美味しいですか？」

「ええ」

先走りとはいえ牡の原液を味わったことでヴィクトリアの雰囲気は、目に見えて変わった。

美味しいというよりも、牝としての本能が求めているのだろう。恍惚とした表情で逸物を見つめ、一生懸命に舌を伸ばしてくる。

その圧倒的な牝の表情にたまらなくなったヒルクルスは両手を下ろし、両の乳首を摘んで引っ張り上げてやった。

「ひいひいひいん!!!」

乳首を摘み上げられて、またいつてしまったのか、ヴィクトリアは目を剥き、涎を噴く。(まったく敏感な乳首だな。というより全身がエロすぎだろ。これぞブリッブリの色気を湛えた女盛りってやつだな。もう、たまらん)

ヴィクトリアを自分の女にしたい。その誇り高き顔を自分の精液塗れにしてやりたいと欲したヒルクルスは、ムチムチブリブリの乳房の谷間で腰の動きを一気に速くした。

「ヴィクトリア様、イきますよ！」

「えっ!？」

驚き目を見張るヴィクトリアの鼻先で、亀頭の穴が広がり、中から白い液体が噴き出した。

ドビュ、ドビュ、ドビュビュビュビュ!!!

「ああああああああ!!!」

射精しながらもヒルクルスは腰を振るつた。

ヴィクトリアの気高い顔が、みるみるうちに白濁液に染まり、胸の谷間にも池ができた。すべてを出し終えたところで、ヒルクルスは腰を止める。

「こ、これが精液……。ああ、凄い匂い。こんな生臭い。それでいて粘る。こ、これが精子……」

顔を精液塗れにしつつヴィクトリアは、頭の中が真っ白になってしまったかのような恍惚とした表情で、肉感的な紅唇の中から舌を出し、ペロリと口の周りを舐めた。

その仕草がたまらなく卑猥に見えて、ヒルクルスは生唾を飲んだ。

（この女、サドっぽい外見をしていたけど、案外マゾっ気が強いみたいだな。これは下手に優しくしてやるよりも、徹底的に牝として扱ってやったほうが効果的かな？）

そう判断したヒルクルスは、正常位よりも後背位で挿入してやったほうが効果的だろうと考えて、ヴィクトリアをうつ伏せにした。



男の極めて身勝手なその提案に、ピンピンに硬くなった乳首を扱かれている女たちは恍惚とした息を吐きながら頷いた。

「ヒルクルスがそれを望むのなら……」

「わたしは貴様のちんぽの奴隷だからな、逆らえん」

いままで対立していた極上美女が、途端に素直になってしまったことに見物人たちは感嘆の声を上げる。

「おおっ」

どよめきの中、したり顔のベルベットも、銀縁の眼鏡のフレームを右手で押し上げながら感心する。

「さすがはヒルクルス様、一段と女を手懐けるテクニクに磨きをかけましたわね」

そんな見物人たちにヒルクルスは声をかけた。

「ベルベットさん、ジェシカ様、シギン、グレイセン、ただ見ているだけじゃつまらないでしょ、こちらにきて、手伝ってよ」

ヒルクルスは膝の上の女たちに身体を反転するように命じる。

ヴィクトリアもユーフォリアも素直に、ヒルクルスに背を向けた。

その左右の乳房を外側から驚掴みにし、狭間に顔を入れたヒルクルスは頬に極上の弾力を感じながら訴えた。

「ユーフォリア様とヴィクトリア様の乳首を吸ってあげて。ちょうど四つある」

「まあ……」

ジェシカは口元を押さえた。

身近で懂れ尊敬していた叔母と、風の噂に聞いて尊敬していた聖女。二人が同時に、同じ男によって性奴にされていることに度肝を抜かれていたのだろう。

しかし、躊躇ったのはジェシカ一人だった。

「うわゝ また、みんなでたつぷりと楽しみたいでしょう♪」

真っ先に動いたのは一番位の低いシギンだった。

どうやらシギンは、ヒルクルスに会いに行く、という情報に接してから、また一年前のような大乱交を楽しめるものだと期待していたようだ。

（こんな可愛い顔して、乱交にまったく抵抗がないんだよなあ）

彼女に続いてベルベットが動いた。

「まったく、ユーフォリア様は、普段はとっても禁欲的でいらつしやるのに、ヒルクルス様の前では途端に女の顔になってしまいますのね」

さらにグレイセンも動いて、久しぶりの旧主ユーフォリアの乳房を手取る。

「ヒルクルス様の女つたらしぶりにはほんと、頭が下がります」

「あ、あの……ここ、礼拝堂ですけど、こんなことしていいんですか？」

一人おろおろしているジェシカに、ベルベットが説明した。

「ここは神の領域。俗世の理は関係ありません。それに愛しい男女が交わることを、神は

咎めだてしませんよ」

「そ、そうでしょうか？」

躊躇ったジェシカだが、尊敬する先輩たちや敬愛する叔母の痴態を見て、我慢できなくなったのだろう。

輪に加わった。

ジェシカが、普段いくらでも接することのできる叔母ではなく、聖女の乳首にこそ興味をそそられていると見て取ったベルベツトが、場所を空ける。

結果、ユーフォリアの右の乳首をジェシカ、左の乳首をグレイセン、ヴィクトリアの右の乳首をベルベツト、左の乳首をシギンが咥えた。

「うわおおおおおお、左右同時……すごおおおい♪」

「ああああああ、乳首から、乳首から、痺れる！ 痺れちゃう♪」

左右の乳首を同時に吸われてしゃぶられる、というのは普通のセックスでは絶対に味わえない体験である。

その激しい性感に襲われて、高潔な魂を持った女たちが、大口を開けて、口角から涎を垂らした。

しかも、乳首を女たちに任せたヒルクルスは、ユーフォリアとヴィクトリアの腰の外側から腕を回し、左手で赤い僧衣の裾をたくし上げて太腿を撫で、右手では剥きだしの太腿を撫で上げた。

(どっちもツルツルだな)

練り絹もかくやといった極上の肌触りに酔いしれながら、手を上げていったヒルクルスは、それぞれ絹のショーツと、金の防具のついたショーツの中に指を入れた。

「はぁん」

絹のような陰毛に彩られた股間と、ツルツルに剃り上げられた股間を同時に撫で回しつつ、肉裂に至る。

そして、ぷっくりとしている陰核を摘むと、まるで逸物を扱くかのように扱き上げてやった。

「ひい、ひい、ひい」

「あ、ああ、ああ……」

淫乱聖女と淫乱領主は、左右の乳首を同性たちに吸われ、さらに男に荒々しく急所を弄ばれて、悩乱した。

ビクンビクンと震える充実した肢体だったが、やがてもはや我慢ならないとばかりにユーフォリアが口走った。

「も、もう、ちんちん欲しい」

「わ、わたしも、ご主人様のチンポが欲しい」

ヴィクトリアも負けずに訴える。

男根を叩き込まれるよさを知ってしまった牝獣は、いかに濃厚な愛撫に晒されても、そ

れだけでは決して満足できないものらしい。

(まったく淫乱な女たちだ……)

呆れたヒルクルスだが、ユーフォリアとヴィクトリアの懇願に辛抱たまらなくなったのも事実だ。

二人を膝に乗せたまま立ち上がる。

「キャッ……」

ユーフォリアとヴィクトリアは、男に押されて前のめりに倒れる。

そこには説教台があり、二人は両肘をついて上体を支えた。

彼女たちの両の乳房はまだ、ベルベット、ジェシカ、シギン、グレイセンによってしゃぶられている。

ヒルクルスは、ヴィクトリアの股間当てを太腿の半ばまで下ろし、ユーフォリアの赤い僧衣をたくし上げ、こちらも赤いショーツを太腿の半ばまで下ろした。

おかげでむっちりとした餅のような尻と、大きいが筋肉質な尻が二つ並ぶ。

ヒルクルスは右手でヴィクトリア、左手でユーフォリアの陰唇を開くと、じつくりと観察する。

「あああ、二人ともオマ○コをヒクヒクさせちゃってぐちよぐちよじゃないですか」

「……ッ」

痴情に狂っているが、二人とも理性の人である。自分たちの痴態の自覚があるらしく震



えた。

それを知っているながら解説してやる。

「ユーフォリア様のオマ○コは、まるで赤身の魚のように赤いですね。新鮮な刺身のように、ペロリと食べてしまいたい。ヴィクトリア様の大振りのオマ○コは貝のようです。照り焼きにして頂きたいですね」

「うゝ、他人と見比べるなんて……酷い」

「そんな若い子と比べられたら……わたしのオマ○コなんて……」

誇り高い女たちは恥辱に震えるが、恥辱は時として媚薬である。特にこの二人はマゾっ気が強い。

陰唇からは失禁しているのではないか、と思えるほどの愛液が溢れて、滝のように垂れ落ち、太腿の半ばで止まったショーツの網に溜まった。

「さてと」

恥辱に震える女たちを嗜虐的な笑みで見下ろしたヒルクルスは、ズボンの中からいきり立つ逸物を取り出し、構えた。

その雄姿たるや、いかなるものも貫く名槍に見えたほどだ。

「まずはどっちに入れてやろうかな？」

ヒルクルスは焦らすように二つの陰唇を行き来した。

「わ、わたくしに……早く頂戴」

「わ、わたしも、もう我慢できない」

焦れた女たちは、大きな尻をゆさゆさと揺する。

赤い身の陰唇と、アワビのような陰唇を、逸物はゆっくりと行き来する。そして、少しずつ入れてやった。

初めは先つちよだけ、次は亀頭部を半分、亀頭部だけ、さらには半分だけ押し込む。

「はあ、ああ、じ、焦らさないで……」

ユーフォリアはザラザラの贅肉で、肉棒を逃がさないようにギュッと締めてくるが容赦なく抜く。

「ああ、ああん、もつと奥まで！」

見た目通り、ヴィクトリアの腔洞のほうが広い。しかし、ぎゅつと締める強さもまた強かった。

(しかし、こうやって楽しむと蜜壺の違いが鮮明にわかるな。ユーフォリア様の腔内はザラザラで、やわやわの柔肉が肉棒に絡みついて離さないミミズ千匹。ヴィクトリア様は物凄く吸引。まるで中にタコでも隠れていそうなタコ壺型だ)

タコ壺とミミズ千匹を交互に味わい、酔いしれるヒルクルスに、女たちが訴えた。

「ちんぽ、ちんぽ奥まで欲しいのお♪」

「奥まで頂戴っ！ もつとガッツンガッツンやられたいのお♪」

欲求不満の気高き聖女と高潔なる領主は、逸物を求めて自分から腰を激しく揺さぶった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takent Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!



二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!



二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!



あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

<http://ktcom.jp/>

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

